

青接地で医療法人りっか会が運営する精神科病院の、患者のための就労支援施設。2010年にイタリアンレストラン（左）をオープンし、2012年にバーショップ（右）を増築。また、2014年に「フーム・モモ」という精神科ディナーカフェを新設した際には、パン販売店③も併設した  
作品名／就労支援施設トリエスティーズ  
カフェ・トリエステ（用途：イタリアンレストラン）  
アトリエ・トリエステ（用途：バーショップ）  
ビアチャーレ・トリエステ（用途：パン販売店）  
所在地 宮崎市佐土原町

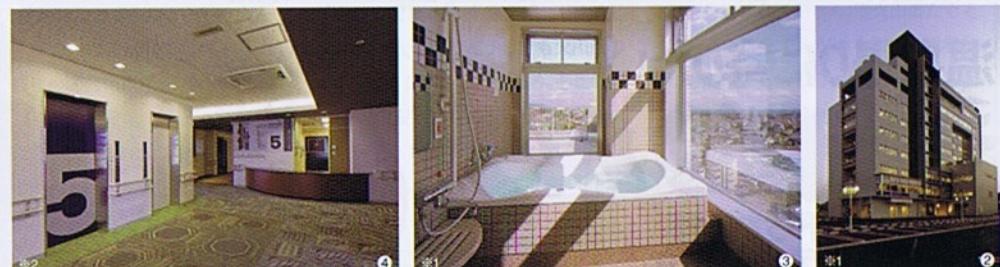
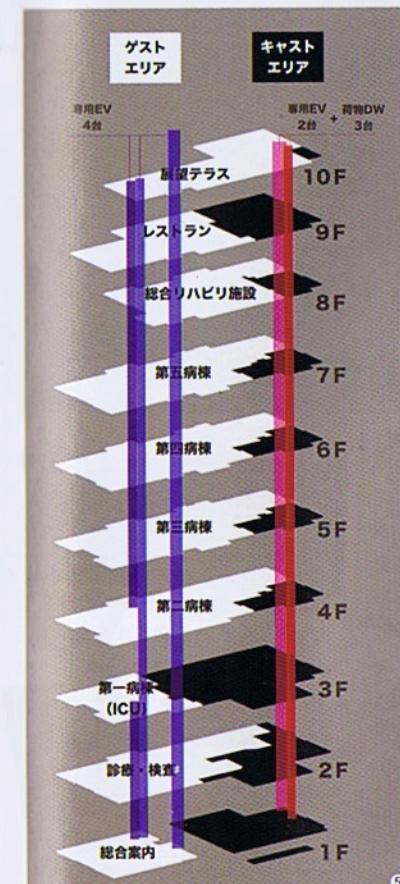


このコーナーでは、「建築」を紹介します。

ここで扱う「建築」とは、美しい街並みの一角を形作るタテモノ、または多くの人々の記憶に永く留まるタテモノのこと。街や通りとの関わりから、建築に込められた持ち主・作り手の想いを紐解きます。

岩野亨さんが手がける医療・介護施設

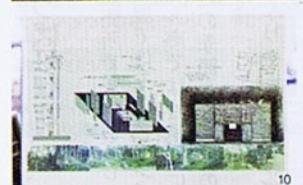
インタビュー：(株)岩野亨建築設計事務所(代表：岩野亨)



①～④65年の歴史をもつ病院を移転新築した「平田東九州病院」(2009年竣工)。1～3階に外来・検査・手術棟、4～7階に病棟、8～10階に総合リハビリ施設・レストラン・ラウンジがある。効率の良い動線を3次元で検討・計画し(図参照)、約800mと、この規模の病院としてはコンパクトな基準面積に納めている点が特徴。撮影:※1印はAioi Pro Photo ※2印はA.P.First 荒木義久  
著作名／原書名／著者名 平田東九州病院 用途／病院(見学不可) 所在地：福岡市伊形町

医療・介護系建築が担う? まちと人の未来風景

延岡南インター近くの総合病院『平田東九州病院』の前に立ち、しげしげと眺めたことがある。人づてに、この病院の設計者はすべての図面作成をたつた1人で行つたと聞いたからだ。10階建ての威容を仰ぎ見ながら「さすがに誇張だろう」と思った。しかし今回、設計者・岩野亨さんにお会いし、話は本当だったと知った。いたずらに高層化したのではなく、医療をサービスとして捉え、患者・スタッフの動きを「3次元動線」というシステムで最適化した結果。医療・介護系建築を多く手掛け、高い情報管理能力と迅速な判断力で理路を見出す建築家だから実現できたものだろう。今後、超高齢化社会へ向かう日本。『trieste』のような就労支援施設としての飲食店も含め、医療・介護系の建築は確実に増え続ける。形や色のインパクトに頼るのではなく、岩野さんのように「理」を重んじる設計姿勢が生む「健康」な建築が、人々の健康に寄り添つていいほしいと願う。



#### ⑨A-Rich俱楽部(用途:通所介護施設)

⑩金丸吉昌 赤ひげ診療所 project  
(計画:診療所)

①Granz(用途:有料老人ホーム)



岩野亨建築設計事務所  
宮崎市大坪東1-6-28  
0985(50)6267  
post@iwano-archi.com  
<http://iwano-archi.com>

A1(594×841ミリ)300枚ほどの図面をすべて一人で描いて、途中で大幅なプラン変更があったので200枚くらい描き直しました(笑)。外注した図面は設備と構造に関するものだけです。図面を、ほかの人によく触られたくない性分で。

「この場合は、コンセプトは院長先生の言葉だったのですが、「医療のディズニーランドを目指そう」でした。」存じのとおり「ディズニーランドはアトラクションやキャラの魅力だけでなく、舞台裏をゲスト（来園者）に見せない完璧なオペレーションが人気を下支えしています。チリ一つ落ちていない清掃の行き届いた園内、常に明るくイレギュラーな事態にも笑顔で柔軟に対応するキャスト（職員）などです。私はそのようなゲストとキャストの動線の分離を、「3次元動線」で提案しました。

ラ、リンクな会話の中でも少しづつ、先方の方針やイメージしている施設の規模・タイプ（入院施設の有無や看護単位など）を把握します。それを持ち帰ってデータ化し、相手の求める施設のコンセプトを一言に近い短い言葉で表現します。そのコンセプトに沿って、診療報酬や人件費といった収支をかんがみながら必要な機材や所要室を割り出し、プラン（平面計画）を練つて総工費を算出していく、という流れです。一般住宅の設計と病院との違いは、施主であるお医者さんはほぼ平面図を読める、という点。みな理路に沿った考え方をされますし、判断が早い。そのため、住宅のように施主のイメージを手助ける模型を作ることは、ほんまりません。

三

18

延岡南インター近くの総合病院「平田東九州病院」の前に立ち、しげしげと眺めたことがある。人づてに、この病院の設計者はすべての図面作成をたつた1人で行つたと聞いたからだ。

10階建ての威容を仰ぎ見ながら「さすがに誇張だろう」と思った。しかし今回、設計者・岩野亨さんにお会いし、話は本当だったと知つた。いたずらに高層化したのではなく、医療をサービスとして捉え、患者・スタッフの動きを「3次元動線」というシステムで最適化した結果。医療・介護系建築を多く手掛け、高い情報管理能力と迅速な判断力で理路を見出す建築家だから実現できたものだろう。今後、超・高齢化社会へ向かう日本。「trieste」のような就労支援施設としての飲食店も含め、医療・介護系の建築は確実に増え続ける。形や色のインパクトに頼るのでなく、岩野さんのように「理」を重んじる設計姿勢が生む「健康」な建築が、人々の健康に寄り添つていってほしいと願う。

**編** 3次元動線とは？

まず基準階を効率的な平面にまとめるため、ゲストが動くエリアとキャストしか立ち入れないエリアを分けました。キャストの空間内も汚物の運搬など非清潔室と清潔室を明確に区切り、キャストは専用の階段、エレベーター、ダムウエーターを使って縦方向に移動します⑤。医療クラーク（医師を補助するスタッフ）は、ゲスト（患者）と接する際にはキャスト（もてなし・癒す人）に徹し、舞台裏での不測の事態の混乱や疲れなどを決して見せない、というシステムです。

**編** 階によって要求される機能や室の大きさも違うので、具体的な設計に反映するのが難しそうですね。

——算数とか、パズルみたいなものです（笑）。繰り返し、徹底して効率動線を検討しました。

岩野さんの設計事例を見ると、カタチや色味の印象は派手ではないですね。

**1 医療・介護系の建築の場合、もっとも重要なのは動線（人の動き）です。誤解を恐れず、岩野さんは「動線や空間構成を検討した結果生じるもの」に過ぎないと考えていました。目的がきれいに実現できていれば、それが最適なカタチかと。仕事が完成し、建築が使われていく中で、クライアントに満足足りていただけたような成果を第一に目指しています。**